日本語教育(中学校)部会

豊かな表現力の育成

～伝え合う力を高める指導の研究～

Ⅰ　主題について

東山梨地区日本語教育研究部会では，小学校・中学校の二部会に分かれての研究体制をとっている。最近の生徒達の実態を踏まえ，このテーマを設定し研究を進めてきた。現代社会の変化に伴い，生徒を取り巻く人間関係も希薄になってきている。自分自身の気持ちを表現する力や，相手の気持ちを理解する力の乏しさが気になる場面も多い。その力こそが「伝え合う力」であり，円滑な人間関係を築くための力として，その育成が求められている。「伝え合う力」を高めるためには，語彙力，想像力はもちろん，他人を思いやる心，感動する心などの豊かな人間性とも関わってくる。そのなかでも「言葉」によって表現する力・「言葉」をもとに理解する力こそが，国語科で扱う「伝え合う力」であると考えた。

授業の中で「書く」「話す」場をたくさん用意すること，また伝えられたことを受け止めること，そして受け止めた事柄，考えを判断し，自分の考えをまとめ深める力へとつなげていきたい。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を統合した力として育てていくことがこの「伝え合う力」の育成であると考え，いろいろな方向から「伝え合う力」の育成を目指したいと授業作り，実践を行っている。

Ⅱ　成果と課題

1　『提案の仕方を工夫しよう』

丹澤　基予子教諭（山梨南中学校　２年）

９月の山梨南中での授業実践では，「提案のしかたを工夫しよう」を実施し，目指す言語能力を「話の内容や意図に応じた適切な語句の選択，文の効果的な使い方など説得力のある表現の仕方に注意して話したり聞いたりする力」と設定した。

授業後半の感想発表会では，他のグループの生徒の感想を聞きながら、自分の考えを聞き取りシートに記入していた。それぞれの生徒が自分達の発表を終えての感想や評価，他のグループへの質問・感想をたくさん書くことができていた。

授業後の研究会において，教師からの指示がなくても，生徒達が自主的にワークシートの記入を行っていたという意見と，再度授業目標について細かく確認を行った方が良いという意見も出された。また，生徒達がワークシートに書いた＜上手なプレゼンを行ったグループへの感想＞＜それぞれのグループの良かった点＞＜この授業によって初めて出会った言葉＞などの前向きな意見を教師が還流することで，さらに生徒達の意欲が高められるだろう。今回の授業実践によって，本部会が目指した言語能力，主張と根拠を使い分ける

力，知りえたことを工夫し，相手に伝える力，表現の工夫の仕方など生徒達が行ったプレゼンテーションの中で見られたことは大きな成果であったという意見が出された。

今後，部会が研究していく課題として，互いに意見交換をすることで，考えを深める指導の工夫が挙げられる。そして，話し合いの場で安心して意見が言える・答えられる雰囲気は国語の授業の中だけでなく，普段の人間関係の育成と大きく繋がっているため，日常生活の中で「伝え合う力」を磨いていくことの必要性の二点が確認された。

2　『何に見えるかな』　※小学校部会との合同授業研究

１月の授業実践では，「何に見えるかな」を実施し，目指す言語能力を「何に見える　なぜ，そう見えるという話題に沿って話し合う力」と設定し，小学校部会と連携し，指導案検討にも参加してきた。１１月に行った研究部会においては，中学校部会の研究部員からも多くの質問･意見が出され，授業者の指導案修正の見通しに道筋を立てることができた。

3　新学習指導要領についての学習会の実施

夏季学習会では，教育課程説明会に参加した部員から還流報告をしてもらい，国語科改訂のねらい・基本方針・言語文化に関する事項についての学習を行った。これまでの学習指導要領との時数比較等も行い，今後，年間指導計画を作成していく上での留意点・取り上げる教材を使って何を学ばせていくことが必要かなどの情報交換が活発になされた。

指導案検討と授業研究を通して，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を統合した力として育てていくことがこの「伝え合う力」の育成であるということが改めて確認された。また，中学校部会と小学校部会と合同で授業研究を行ったことで交流が図れたこと，小学校で行われている「話す・聞く」活動を見学できたことも中学校教員として有意義であった。

「話す・聞く」という力は，以前は普段の生活の中で自然と身につけているものであったが，最近は変化してきた。「伝え合う」という活動が成立するためには，相手を意識し，状況に応じて自分の考えをきちんと話す力が必要である。話し合いを行う中で，考えが変わったり深められたりし，それを再びかえしていくことで，相互に伝え合う力，考える力を高めることができる。しかし，時代・環境の変化に伴い，自分の考えを相手にきちんと伝えられない，自分の中にある思いを的確に言語化できない生徒が増えている。自分の意見を主張するときには，他の意見を持つ者がいることを認めなくてはならない。国語の授業において，「話す・聞く」活動について改めて見直していく部分も必要であると感じている。また，普段の学校生活・日常生活のさまざまな場面において国語力を身につけていく必要がある。また，教材開発の際，五つの言語意識＜目的意識＞＜相手意識＞＜方法意識＞＜場面状況意識＞＜評価意識＞について明確な視点を持っておかないと子ども達にとって魅力ある学習材となることは難しい。

（　部長　　佐々木　梢　）